

紹介

●日本貨幣流通史 小葉田 淳著

我國貨幣制度が名實共に完全なる統一の實現を見たのは、明治政府によるものである。徳川幕府時代、ある程

度の統一が行はれないではなかつたが、鑄造貨幣なる交換の媒介手段を大陸文化の攝取によつて知り初めてより他の外來文化に俟つゝ同じく、國民の無關心、忌避、反抗等、又社會事情の紛亂は容易くその統一を許さなかつたのである。事實、貨幣の圓滑なる流通を見る迄には、世界各國何れも長い歳月を要して居り、等しく近世に至つて漸く其目的を達してゐる。此の貨幣の流通發達の社會經濟史的考察は重要な意義を有する。

本書は「日本貨幣流通史」の題名を採つて、平安朝以來近世初期に至る考察を遂けてゐるが、主たる研究の對象は中世にある。支那錢の輸入による貨幣量の増加にまつ一方、貨幣鑄造の業が次第に全国各地に起り、漸く統一

の曙光の見え初め來つた時代にある。然も此の中世、史料が分散的であり、紛糾錯綜してゐるが爲に、研究の困難を伴ひ未開拓の分野の觀を呈してゐるのである。著者は現在臺北帝大に職を奉ずる新進氣鋭の史家。京都帝大在學中より研究を重ね、精研を加へて學界に此の輝しき一篇を送出した。

本書は之を銅錢、金銀の前後兩編に分ち、前編に於て貨幣流通の展開より近世初期に至る動態を闡明し、特に善惡兩錢並用の中世末期の状態を、それによつて生ずる撰錢とその條令、更に惡貨の増加を其經濟的意義に考察を進め、徳川時代の幣制に至つてゐる。後編金銀に於ては、その貨幣的發展を觀察し、身分階級の障壁を撤して一般社會に浸透し、貨幣の職能を具備し、幣制の確立に至る過程を、內的に社會の經濟的體制、外的には金銀の產出量、存在量より説き、その近世の社會、經濟、文化の上に及ぼせる意義を明らかにする。附録に「我邦貨幣と厭勝的使用との關係に就きての考察」の興趣深き一篇を載せてゐる。たゞ本書に索引を缺くは、其性質上惜し

まれる。

蓋し本問題に於ける根本史料は極めて零細なる斷簡零墨であり、之を涉獵し、驅使し、綜合して結論を見出すのは容易の事でない。著者は近世以前の貨幣史に基礎的研究の必要を感じ、「廣汎なる史料の検討に嚴密なる其批判」並びに「深廣なる再吟味の切要」を主張するものであり、その下に未開の境地に入つて博引傍搜、微に入り細を穿つて紛糾せる貨幣の流通に關し其真相を把握せんとしたる眞摯なる研究心、不撓の奮闘方こそは本書を繙く者の等しく感ずる所であらう。而して其等の史料の統計的検討を試みて一新機軸を出し、學問的體系を與へたる所、我が國貨幣史を大成する劃期的文獻の一たるを失はぬ。

三浦博士は序文を寄せられて「本書に依つて始めて此方面に光明を與へらるゝ事は少くない」と稱揚せられ、更に著者の處女出版を學界に送り出すに當り「學界により以上の寄與をなじ、稱讚を博する日の到來を期待」し、「此かゝりやかしき期待を以てはなむげの辭」させられて、

その前途を祝福せられてゐる。

貨幣流通の表面的過程に流れず、社會經濟史の見地より觀察せる本書を學徒に薦めたい。(菊版四五八頁、コロタイプ圖版三葉、東京刀江書院、價三・二圓)(寺尾)

◎近代
日本外國關係史

田保橋 潔著

著者は十年來近代日本外國關係史を研究し、其の業績の一端を時々諸雜誌に發表されたが、今舊稿を全部改訂し其後の新研究をも加へて本書を世に出だされた。其の記述の範圍は十八世紀以降十九世紀中期に至る約一百年間で、露、英、米三新興勢力が次第に我國を壓迫し、幕府當局をして苦心焦慮、遂に其の祖法たる鎖國令を廢棄し、再び歐洲人に國土を開放するの已むなきに至らしめた事實を、内外の史料によつて詳細に記述してあつて、日本近代外交史の研究には必讀の書である(菊版七二〇頁、東京刀江書院發行、價六・二〇圓)(松野)

◎日本民族學 神事篇、風俗篇、歴史篇 中山 太郎著

著者は柳田氏折口氏等と共に日本民俗學の成立に全幅の努力を拂つた人であり日本巫女史を始め多くこの方